MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．５．２１　発行元
第 479 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

昨年出た本の中から

昨年出版された本の中から４冊を紹介する。昨年出た本はたくさんあるのだが、どうしても自分の好みがあるので毎回似たような作家の作品ばかりを取り上げることになってしまう。お馴染みの常連作家…。

普段行かない図書館へ

私の住んでいる市には８箇所に図書館がある。いつも定期的に行っているのは３箇所。最近になって普段は行かない図書館にも顔を出してみるようになった。最近建てられた図書館は新しくきれいだ。ただ並んでいる本はどこにでもあるようなものばかりで、私が読みたい本は少ない。図書館というところは文庫本の購入は少なく、単行本が中心で、比較的新しいものばかり。昨年出た本を探すのにはちょうどよい。

市の中心図書館でも同じ本を購入しているのだが、貸出中の連続で、なかなか順番が回ってこないものも多い。その点小さな図書館は借りる人が少ないので目標の本が棚に残っている確率が高い。

ＳＮＳ上に市の図書館ネットワークが組んであり、本の題名さえわかればどの図書館にあるかが瞬時に検索できるし、貸出中かどうかもわかるようになっている。昔では考えられないことだ。便利である。他の市町村の図書館もそうなっているのだろうか？

中山七里『作家刑事毒島の嘲笑』

昨年の７月に幻冬舎から出た本。『作家刑事毒島』『毒島刑事最後の事件』に続くシリーズ第三弾。一旦警視庁を辞めて作家になったかと思ったのに、再任用で刑事技能指導員という肩書で捜査に復帰している毒島。ミステリ作家との二足の草鞋だ。今回は左翼テロリストとの対決の話である。

保守系刊行物を出す改新社という出版社が放火された。「急進革マル派」と名乗る犯行声明が送られてきた。公安所属の淡海は毒島と行動を共にし、事件の捜査に当たる。今回は政治の話が中心になり、与党野党の駆け引き云々について毒島が得意の毒舌を振うけれども、皮肉のきいた面白味という点では前作より少し劣る気がする。

佐藤青南『人格者』

昨年７月に中公文庫から出た本。前年の『連弾』に続く音喜多＆鳴海コンビ・シリーズの第二弾。このシリーズは音楽をテーマにしている。鳴海桜子は警視庁の音楽隊採用であるにもかかわらず刑事事件を捜査する刑事をしている。

今回は関東フィルのコンサートマスターを務める久米充という人物が頭を殴打されたあとカーテンをかぶせられ、火をつけられ死亡した事件を担当する。現場からヴァイオリンが無くなっていた。久米は他から恨みをかう人物ではないようなのだが…。音喜多＆鳴海は家族から話を聞き、次いで関東フィルの関係者から情報を集めていく。音楽がらみの話が続く。音喜多本人や鳴海本人が抱える事情についても少しずつ明らかになっていく。佐藤青南の作品としては地味な仕上がりだと思う。

柄刀一『或るアメリカ銃の謎』

昨年７月に光文社から出た本。名探偵・南美希風シリーズなのだが、『或るエジプト十字架の謎』『或るギリシャ棺の謎』に続く『柄刀一版・国名シリーズ』の第三弾ということになる。エラリー・クイーンの『国名シリーズ』を下敷きにしているので、本書収録の『或るアメリカ銃の謎』も『或るシャム双子の謎』もＥＱ作品を読んでいることが前提になる。『或るアメリカ銃の謎』は琵琶湖畔のアメリカ領事の私邸で起きた連続銃撃事件を扱っている。アメリカで起きている人種差別的な警官の事件も関連。ちょっとギクシャクした流れにが気にかかる。

吉川英梨『十三階の仇』

昨年の５月に双葉社から出た本。シリーズ第５作目。『小説推理』に連載された後単行本になる。警察庁直轄の諜報組織としての『十三階』の活動を中心に据えたスパイ小説のシリーズ。とは言いながら、女スパイの黒江律子の孤独な奮闘を描いた物語とも言える。前後関係の流れが続いているので、必ず一巻目の『十三階の女』から読むのがよい。

本書は「内閣情報調査室」の「内外情報調査部」創設によって「十三階」が解体されてしまうところから始まる。日本に止まることができなくなった古池慎一と律子はインド洋の小さな島に避難する。しかし、スパイは落ち着いた生活をすることなど許されない。南米コロンビアで日本のＮＧＯ職員が誘拐され、その後惨殺体で発見された。急遽政府から派遣された十三階の元校長が現地の反政府組織に誘拐される事件に発展する。テロリストからの要求で慎一は交渉役として呼び出されてしまう。過激で強烈な場面が連続して続いていく。そして、裏に隠されて見えない律子の動きは…。